

麻生路郎★主宰

川 柳 雅 証



No.
250

Fenŝoj flugas trans la land-limon

昭和十三年一月一日發行
創刊大正十三年・遊卷二百五十號

文藝化國家に與ふ

片山内閣が成立した時、首相の口から眞つ先に飛び出した言葉は耐乏生活であつた。物質不足の日本の現状で耐乏生活は好ましくないと云つたところで國民の大多數は耐乏生活より外に生きる術のないことは云はれるまでもないことであつた。殊に私の如きは職業川柳人を宣言した昭和十一年から既に耐乏生活を續けてゐたので、首相から耐乏生活の説かれても、首相から策の施しやうもなかつた。たけのこ生活だの、玉ねぎ生活だのといふ言葉も一つの穿ちとして、うなづ

いたに過ぎない。一着の洋服を十年一日のやうに着てゐる身に、竹も玉ねぎもないからである。しかし、私は常に川柳によつて心のうちほひを失はない生活を續けて来たことを欣ぶものである。そして自分の欣びを他の人達にもわかち與へようとして「川柳雜誌」を刊行しつづけ、句會に講演に東京西走して今日に及んでゐるのである。昨年の食糧危機に際しては黙視するに忍びず、微力を顧みず代議士職にうつて出で、彼等の苦難を救はうとしたのである。が世の中は誠意だけでも正直だけでも、どうにもならぬ場合の多いことは誰もがよく知

悉してゐる通りで私の政治的方面からの人類愛は美事に失敗したが、私には川柳と云ふものがある。川柳は他の文藝よりも人の胸底深く浸潤し易いものであるから、この短詩文學の力を平和國家の礎石としたい念願を貫徹させたであらう。それは君の一つの夢に過ぎない。そうだとすれば私の一つの夢に過ぎないかも知れない。しかし、人が空を飛翔したいと願つたのも一つの夢でしかなくつたのである。私の夢も絶対に不可能であるとは誰が斷言し得やう。日本は憲法によつて武器を捨てた國である。そして今後の日本は

文化國家を目指して再建すると云ふ。その言葉はまことに美しいが、今日の爲政者で眞に文化の理念に透徹した士が幾人あるであらう。短詩文學の過大視を笑ふ人達が政府の援助がなくとも芭蕉の俳句が日本の津々浦々に波及して、世の人心の清浄さに役立つことを知るべきであらう。しかも俳句は消極的であり、綠茶の味ひであるが、わが川柳は積極的であつて綠茶に對する珈琲にも比すべきものなのである。新日本の爲政者にして眞に國を愛するならば、斯した短詩文學の影響力に目をはせて永遠の平和を企及すべきではなからうか。(略)



川柳詩談義

—ある俗歌に寄せて非詩論に問ふ—

東野 大八

露は尾花と寝たという
尾花は露と寝ぬという
あれ寝たという、寝ぬという
尾花が穂に出てあらわれた

このうたの趣きは勿論科學ではない、だが世俗の因果律ではすじが通る、つまりまつどうな理窟では割切れぬが、人間性の本意には充分かなくいうることだ。そのかない方にまづ訴へてくるこのう

たの強味は、その快いリズムと諷意であらう。酢だこんにやくだと言つても結局こうなつてゐるではないか、という憂きこと多き人の世の比喩の一つがそれらの味合を更に深くしている。杓子定規一つでは参りかねる人間性の飄渺たる感性は、所詮屁理窟であつてもこうした言ひ廻しにより深い共感を覺へることに川柳

人には忘却出来ないふくみがあると思う。
科學や理窟や動くものが動く式な説明句はよし正しい批判力を持つにしても迫るものがない。句に情味の展開がなければ胸にしみない、そんな情味があつても眞味がなければ忘れられる、情味と眞味があつても美を考へなければ捨てられる、世に廣く愛誦される句というものはこれらの三つの條件が揃はなければ資格がない、この資格ある句を生むにはやむにやまれぬ人間のことろをそのまゝうたう素ばくさがなければあてはまらない。

う、うがちは要約の輕味により想念のひろがりを持つ表現でもあり、それ自体がユーモアの要素を帯びる。嚴密な藝術文學の場に立つならこうした表現形式は特定のものどきれ、二流的たらざるを得ない。この様に按ずるとこのうたにおける詩の所在と同様に川柳の詩もまた二義的となるのは當然である。
さて川柳が詩であるか非詩であるかの興味ぶかい問題だが、これについては常に作句以後のものであつて決して作句に前提されるべきものでないといふ私はいつも考へてゐる。非詩か詩かもう一つとび抜けた純粹詩か、とにかくそんな立場で作句を無理強いすることはのびのび、句をつくることにはならないと思う。ひつき

十二月號目次

表紙 (千手觀音)	田村孝之介
文化國家に與ふ	路郎生 (一)
川柳詩談義	東野 大八 (二)
素の風流	福田山雨樓 (三)
續川柳齋座 (丑)	
戀を詠んだ句に就て	
前書	路郎 (六)
蕪筆春秋	
無一君を憶ふ	
今様勅造帳	
古城の怒り (上)	上田 翠光 (七)
川柳と俳句の區別	
偶然に出来た話の泉	山路 閑古 (八)
古句研究を志す人に	不朽洞主人 (二)
川柳塔	麻生路郎選 (四)
近作柳樽	麻生路郎選 (六)
各地柳壇	
川柳不朽洞會から	
六號室	路郎生 (六)
動靜	

よう川柳の詩観というものは句の後に生じる鑑賞の分野であり、過去現在の川柳のみつめ方であつて、いわば定義の方便に過ぎない。詩か非詩かその論争の要點は、私のこれは判断だが、作句態度の觀念のとり上げ方でないかと思ふ。詩を句に持する觀念はかなり眞摯な立場をとるが、非詩の場合は安價な傳統的要素をふくみ「あそび」の肚がみえることである。これは勿論至極大づかみな言ひ表し方だが、いづれにしても非詩派の心安げな川柳觀が明日の川柳を不安定なものにすることに承服出来ない。現在の非詩派の處し方は確に古川柳のあの卑俗なくすぐりを後生大事に抱へこんでいる。ある人物に至つてはその古句の魅惑に襟首をつかまれてふり廻されてゐる觀がないでもない。この様な非詩派の人々に求めたいことは、古川柳から今日に及び來つた川柳の成熟過程も見極めず、奮然依然たるこれまでの要素のみを金科玉條とする思いこみを速かに一洗せられたいということである。川柳の大切なその要素自体がどの様に取扱はれ、新たな精神を帯びつゝあるか、この點が特に強調したいところである。

この様に述べると私の立場は結局川柳詩の側に立つことになるが、正直なところ私は川柳詩論についてはさう論ぶる必要がないと考へてゐる。何故なら川柳における詩は既に川柳の要素であり川柳と一つであると思ふからである。さきにも述べた如く川柳の場合の詩は總觀的には二義的であつても、その本質は要素にくらりこんでいる。つまり川柳の全人格的なものに融合してゐるからである。その見方の根據は、生き惱み悲喜交合の豊かな感性を抱きつゞける人間の姿は常に詩であるからである。詩をつくる者のみが詩人ではない、生活に何か胸打たれるものを感じ出來得る人もまた詩人である。月や星より強い眞實の詩を瓦一枚でも鋭く深く宿すことが出來るその眼は人間である。その人間がその時その場のこゝろを偽りなくうたればそれは詩ではないか。水の如く人間の感性にくまなくしみ透る詩性の所在に敏感に映じだす一句のうたは、本當の詩のうたである。この場合その作品は卒直に言つて川柳でも俳句でも短歌でも詩でもよい。誰かでもそれを川柳だと叫んでくれていたらそれでよいのだ。自意識過剰の詩は既に詩ではない、その詩人たちが持ち廻る詩は川柳の調味料と品格向上の衣と心得る愚な粉飾用の詩に過ぎない。

發展はない、詩は勿論川柳自身川柳と意識しないまでには作句精進がつゝこんで進まなければこれからの川柳は生れ得ないし、川柳の社會性は持てない。川柳はわがこゝろである。きつぱりそう言い切れる川柳人が本當の明日の川柳人だと思ふ。

新たななる川柳の芽が近い將來かならずや非詩連の挑夢を追うことを私は信じ續けやう。

非詩は柳と寝たという
柳は非詩と寝ぬという
あれ寝たという 寝ぬという
柳に芽が出てあらわれた
芽が出ても柳に花はまだ咲かず
大八

素の流風

ふ 恩を兄樂 柳

福 山田 雨樓

發展はなくて、詩は勿論川柳自身川柳と意識しないまでには作句精進がつゝこんで進まなければこれからの川柳は生れ得ないし、川柳の社會性は持てない。川柳はわがこゝろである。きつぱりそう言い切れる川柳人が本當の明日の川柳人だと思ふ。

新たななる川柳の芽が近い將來かならずや非詩連の挑夢を追うことを私は信じ續けやう。

非詩は柳と寝たという
柳は非詩と寝ぬという
あれ寝たという 寝ぬという
柳に芽が出てあらわれた
芽が出ても柳に花はまだ咲かず
大八

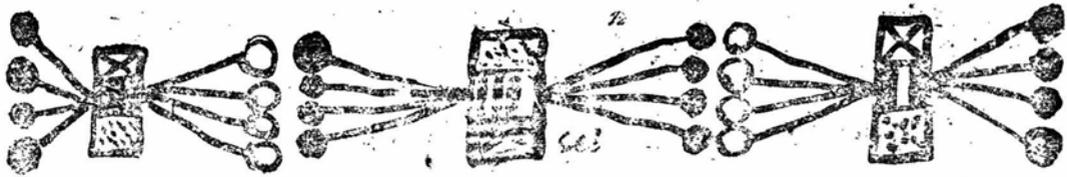
男女両性に作用する

プレホルモン

山野製薬 皮下注射・錠劑

話、雜草と江口と休閑地、岬木徒然などがある。中でも岬木徒然は前後十三回に亘り掲載され、主として植物に關する該博なる智識と、文學への連繫についての研究であり敬服の外はない。兄の如き植物及藥學の立場から川柳を研究する作家の存在は、川柳分科の向上を期する上から極めて重要であり、兄の他界は一入痛惜に堪えない。

兄はまた句評、月評にも努めて参加し、直截にもものを云つてゐた。しかも公正妥當な見解が多かつた。今雜誌の句評を繰返して兄の潜在的熱意に打たれた。自分は西田岬樂論も發表したし、兄の書齋を訪れて熱論したこともある。兄今や亡くまことに秋風落葉の感が深い。兄は素の風流を体得した一人だと思ふ。



大阪市 武部香林

蟲よ泣け々々名月はそこにあり

子澤山今日はお風呂を止めどころ

映画館エロチシズムでゆく気かね

ロソクがホ、ホ、ホ、と崩れたり

寒くならぬうちにと蟻の列續く

お眼鏡に叶ひ破れた服である

伊丹市 岩崎柳路

戦前は戦前はどの愚痴を聞き

民主主義のお巡りさんにたかられた

此の病氣には三千圓のペニシリン

そう啼くな俺も寂しい秋の蟲

奈良縣 上田翠光

大阪の秋は舌から訪れる

經濟に籍あり巡查よく太り

放尿へ女巡查は横を向き

心澄めば山は色づく音がする

横濱市 福田山雨樓

三男重忠(二句)

命守る妻の真剣さに打たれ

子の脈を念じ相座する老夫婦

紳樂兄を偲ぶ

下手な醫者ほど知つてゐた處方箋

亡兒を偲びて(三句)

佛前へ今日雛からの初玉子

骨箱にギツシリ詰まりさようなら
骨箱のまだぬくもりをしかと抱く

山口縣 岡村路三

珍客にまだかど覗く台所

子澤山台所まで床をのべ

ガムシヤラの世に並木丈江戸姿

月仰ぐ人闇屋とは見へぬなり

抜きかけた手元にナスの花一つ

母よりの小包の紙飾多き

玉葱も吊つて余裕のある暮し

強盗の味方の如く停電し

名古屋 吉田水車

のみ一つ大事な本の上を飛び

淺ましきものゝ一つに紙幣をよむ

二號さんも手箱を持つていそがしい

招待祭樂日に近き日附にて

よくもまあこれだけに切れたハムの嵩

大阪市 須崎豆秋

秋の灯に讀みたい本が陳らべられ

負けたのも知らないヒマの二三本

三月に焼かれたことはもう言うな

滋賀縣 北川春巢

總入齒アイスキャンデーには困り

混雑の車内百圓札を讀み

どこからか子供集る故障バス

持つて出たタバコが切れて旅終る

イングリッシュ・カンパセーション老眼か
けて讀み

奈良縣 尾崎方正

春夏秋冬娘は街の方教師

物價高醫は仁術がどこへゆく

防衛堅固栗の外皮に似た娘

下關市 櫻川不水

秋光さん〜我未だ衰へず

打下す鉄先ヤミに克たんとす

画は難し詩は又難し秋の月

歡聲を浴びて薯さん踊り出で

二合五勺だが三合は僕も食ひ

戀人を代用食で喜ばせ

岡山縣 濱田久米雄

正州、不二雄、凡羊君結婚(三句)

二人行く道はるかなる山と川

信と愛今日から二人づれの道

新妻の頼り切つてる眼にこたえ

仲人の又來たという進みやう

十圓をもうけてやつた鶏の聲

千六百億は札束ばかりなり

大牟田市 高田抱逸

着物とは言へず縁談ゆき惱み

營團の監事だけれど瘦せてゐる

九住登山

紳士等がマシラの如く栗を探り

古着屋を刑事のやうな眼であさり

大阪市 木下幽王

廣い世間をたつた二人にする夫婦

盤聲張上げ亭主關白を固執せん

ダンスマニア歩く姿も鶴に似て

秋肅條つもる不平をいかにせん

あちらにもこちらにも小説になる話

ガリ〜盲者がうよ〜君も僕も

若妻あはれ近所はみんな年増連



こんな時節ですのではうまく逃げ
たはむれの戀にあらねど金がつき
美しい帯と帯とが振返り
ヒステリックな文學青年の赤いネクタイ
嬰兒までもつと稼げと云ふ目つき

鳥取縣 中島 鐵 洲

野心滿々入道雲を凝視する
奥様の風情もありて闇屋なり
祖父の目鏡があふも淋しく
不覺にも泥棒猫の眼にまけて

うらぼん(三句)

精靈を迎えて老母は狭く寝る
ところてん母若かりし頃の味
袈裟とれば何を憚る酒香
吾を慰するに海の咆號

丸焼けになつて持つてた事が知れ
米を磨く音絶ゆるなど思はざる
叱るな俺の劣性遺傳だよ
何に目付けたか鶏の走りやう

商用に娘の便箋を躊躇する
落ちてゐる櫛にふり向くのもみだら

大阪府 川 村 好 郎

退社ベルお化粧どうにすんでをり
よろこびを忘れてならじ今日も無事
考へてをこうと言つてくれただけ
おもむろに便所に立つた王手飛車

近所への意地が八分の芽を買ひ
十一月三日空は昔のまゝの色
警官を間違へたのか小料理屋

大阪市 橋 本 美 奈 子

停電へ佛壇の灯と語る秋
洋裁へ通ひ靴にもはきなれる

出雲市 尼 綠 之 助
煙草の輪やりくり話もつき果て、
一人旅詩人のように海を見て
身ぶりいろく雀の朝となつてゐる
大ヤメの記事にあつばれ名士なり

大阪市 水 谷 竹 莊

愛してる方がなやみが多すぎる
家計簿へ牛肉買った日をさがし
百圓で暮せた頃をなつかしき
人情がのみこめて来た子の便り

何處からか看護婦花を折つてくる
こしらへてあとからたてかたづけて
金を貸す方がすり切れの服をきて
親馬鹿の馬鹿になるのも一苦勞
茄子の色かわりますと起こされる

下松市 弘 津 柳 慶

うかつにも妻のパーマを今知つて
ミスボリスお辭儀した子へちと笑ひ
榮轉と云ふへ家族は別居なり
榮轉はしばらく自炊續ける氣
情熱もさめきつてゐる女の手
開市でひよつこり妻とすれ違ひ
薄化粧女の自信失せていす

肉親の夢を見た日は罪を悔ひ
何にこれは御目出たですよと醫者笑ひ

鳥取縣 杉 谷 湖 山

サンマertimeなどとお役所書癡して
紙一重巧に渡り髭を置き

向日菱のかくまで強く生きんとは
現實は子寶等と言へぬ世や
父母にすまない墓にしてしまひ

若屋市 小 澤 史 葉
巡回の巡查が瘦せた犬に會ひ
い、仲は男女同權ふるくさし
恐しい物は闇屋の紙幣束よ

大阪市 市場 没 食 子

サラリーへ妻が氣まづい思ひさせ
病院をさして輪タク急ぐなり
つゝがなく疎開やめをまだつゞけ
自然詩がすきで息子の覇氣が抜け

大阪市 橋 本 綠 雨

初ものを一つ供へて子を思ひ
残された父は苦しむこと多し
佛壇は寂しさを増す一つなり
忘れんとしても忘れぬ一人ばち
配給の米箒などすて、行く

雑草の仲間にされて勤續し、
板一枚お隣を呼ぶ復興地

金澤市 安 川 久 留 美

祝某氏令息結婚

蝶々の番いキコクも痛からず
一束の薪妊しんな、月か
ネクタイが顔へ来る風海碧し
運轉手忘れ扇の字をよめず
家傳藥効かす考松枝が枯れ

松 山 前 田 五 健

ぜんざいもうどんもあつて農家さま
當地話の泉會へ出席

話の泉涼しさうなは司會役
雲に乗るのぞみ子供は歌にする
やつぱりうちがよいと祭から歸り
照り降りる雲につながる職を持ち

吉日の且には父の釣つた魚



續川柳講座 (11)

麻生路郎

戀を詠んだ

句に就て

戀を詠んだ句は大雑把に分ける二つになります。一つは戀そのものへ批判のメスをあてたもの、他の一つは戀する人たちのいぶきをこの短詩の力を藉りてつたへてゐるものとであります。試みに古川柳の中から戀を詠んだ句を拾つて見ますと、その殆んどが、戀と云ふものを、冷めた眼で眺め、戀そのものを客観してゐるに過ぎません。情熱を燃やした句、戀の奴隷になつた心境を詠んだ句に接しないことでもあります。たまたま、それに類した句があつても、それは情痴の世界を曝露した所謂バレ句に近いものであつて純情な戀ごろころは云へない程度のものであります。人情の發露である戀ごろころが、人間詩と云はれる川柳に於て極く大膽に自由に詠まれるかないかと思はれ、それは川柳の生ひ立ちが、前句の附句として詠まれたのが素因をなしてゐるのではなからうかと思ひます。

次に、古川柳の戀を詠んだ句を例示することにいたしませう。

人間に尻目といへる飛道具
手入れたよりも野菊が御意
に入り

十三と十六只の年でなし
下女が戀日に三度づつ實を
見せ

ほれ薬十日過ぎてもまたば
なれ
出代の涙にしてはこぼし過ぎ
惚れた奴見ぐるしいほご使は
れる

そつとあく戸の内外の面白さ
そんなこと存じませんと鶴を
折り
その手代その下女はばもの云
はず

この外、幾らでもあります
が何れも以上の句に類したも
のに過ぎません。その一句一
句を味讀させたらうなづけま
すやうに、まことに冷めた意
穿ち本位の句であります。句
意の解説は一々いたしません
が、「人間に」の句は、ウキ
ンクを面白く詠んだのに過ぎ
ないし、「手入れた」との句
は餘所の花は赤いといふ俗諺
を句として表規したものであ
ります。出代といふのは昔の
奉公人は春秋の二季に主家を

辭するならばしとなつてゐた
のであります。これらの句の中
でも、「そつとあく」や
「そんなこと」などは巧みに
描寫してゐると云へますが、
これは表現の力が、そのすべ
てであると云ひたいのであり
ます。

以上は古川柳の戀の句に就
て述べたのであります。今
人の句には矢張り古川柳式な
觀方以外に、戀する人の眞情
を自由に奔放に吐露してゐる
句に接するのであります。こ
の点、川柳の一進境を示すも
のだと云へませう。

大正初期に私が刊行いたし
て居りました柳誌「雪」か
ら、日車の句を覗いて見ます
と

思はじと椿の花を火に焙へて
物足らぬまゝに鏡の前に立ち
カナリヤを覗いて今日も過ひ
に行き
いつ来てもおんなじ齋物きて
る戀

同じ事氣をかれて女寄り添
はず

來ぬ管の人をブラットホーム
に求め

二三日新聞も見ず過ふてあ
たなどがあります。尤もこれに
よつて大正初期に於ける私
ち一派の句風がうかがえる譯
であります。その當時に
は、そんな句は川柳ではない
と非難を浴びせられ全然異端
視されたものでしたが、それ
が、後にそれ等の入達によ
つて新傾向の名によつて呼ば
れるやうになつたのでありま

す。そんなことは兎も角とし
て、右の句を味つて見れば、
古川柳と全然行き方を異にし
て、戀するものの眞情を餘す
どころなくぶちまけてゐるこ
とに氣づくではありません
か。しかも「思はじ」との句
には詩情の豊さを見ることを
出來ますし、「カナリヤを」
の句には若さがにじみ出てゐ
るではありませんか。「二三
日」の句にいたつては戀する
ものみにゆるされる境地を
巧みに詠んでゐると思ひま
す。「來ぬ管の」句の如きは
戀の句でないに云へば云へな
いこともありませんが、ジツ
と噛みしめて味へば矢張り戀
する人の人待ち顔の哀れさが
仄かに感じられるのでありま
す。これらの句を綜合して味
讀するに日車の中年の戀ごこ
ろを身近かに感じずにはゐら
れないのであります。

私の句では
行末はさうあらうとも火の如
し
や
名を棄てて十七八の戀もせむ
戀の畏の眼だらうか眼だら
うか
おろかにも頻見に行けば雪に
なる
人妻のあまりに長き袂なる
などがあります。行末の句は
若い時の句であります。「名
を棄てて」との句は中年頃の
句です。ソロ／＼冷靜な自己
批判が首を擡げてゐます。
戀も斯うなつてはおしまひで
す。も少し、他の入達の句も

初戀の河をはさんで淋しがり
身一つを任せば男白々し
(春三)
これも、自己批判の句でせう。
逢ふてやつて下さい坊や歩き
ます (石竹)
切實なものを感じさせられ
ます。
婿曳や葡萄色なる闇もよし
詩趣の幽艶さが迫つてまゐ
ります。
戀人を逃すまいとて嘘をつく
戀するものの愚さがよく描
かれてゐます。
(一文字)
戀なのかしら見送りもしてか
たく (柳秀)

血を降下
アーグレン
血脈アクトホルモンとアミン
山之内製薬

列べて参考の資といたしませ
う。
初戀の河をはさんで淋しがり
身一つを任せば男白々し
(春三)
これも、自己批判の句でせう。
逢ふてやつて下さい坊や歩き
ます (石竹)
切實なものを感じさせられ
ます。
婿曳や葡萄色なる闇もよし
詩趣の幽艶さが迫つてまゐ
ります。
戀人を逃すまいとて嘘をつく
戀するものの愚さがよく描
かれてゐます。
(一文字)
戀なのかしら見送りもしてか
たく (柳秀)

作者は醫博であります。常に謹厳であつた學者の胸底にも斯うした戀ところが秘められてゐたものと思はれます。

ひばり鳴いたとてまぎれまじよかれ赤椿 (菘豆) 表現は短歌的ではありませんが、戀するものの悶々の情が、よく描かれてゐます。

戀の疲れズボンを取いて寝る (刀三)

卒直に、投げ出したように詠まれてはゐるが、一人者のやる瀟々さが出て居ります。

戀しさは風にも聞いて見たうなり (白蝶)

ひとりゐてなやみになやむ男ごころを遺憾なく表白してゐる句だと思ひます。

以上列擧した以外に今人には多くのすぐれた作品がありますが、これで大體の句ぶりはお判りになつたことと思ひます。

終りにて、今人の作で、古句式表現によつて詠まれた句の幾つかを例示しておきます。

果敢さは車掌の戀の刹那主義 (路郎)

人前は相思と見えぬお辭儀を (柳秀)

頼りないわくと惚れてゐる (三五笑)

清教徒たりしも戀の十五六 (九坡)

他人の戀おでこの奥から靜に見 (方正)

斯うして列べて見ると、巧いには巧いが、心境を詠んだ句ほどに迫るものがないと云へば云へぬこともないで

せう。

前書の句

前書のある句に就いて述べる前に、前書に就いて少しく談じておく必要があるのではないかと思ひます。それは私たちが單に人生觀や社會觀を句に詠む場合にはその句の前に、前書を用ひないが、妻が亡くなつたとか、友人を驛に送つたとか、開店をしたとか、天皇をお迎えしたとか、作者の作句當時の環境を特に知つてもらいたい時に、それ等の句の前にその意味のことを附ける語を指して前書と呼んで居ります。従つて前書の力を藉りて句の持味を補足しようとする考え方であつてはならないのであります。句は何處までも句として獨立して價值あるものでなければならぬのであります。前書がなければ句意が判明し難い句をよく見かけますが、前書もたれかかつて、句の燃焼をおろそかにしたのでは作者のひとりよがりの句に過ぎないものとなり得ます。作者としてどんな句にでも前書をつけることは自由でありますが、前書がなくとも立派に句の態をしてゐなければならぬのであります。

靈子の句に、

次男逝く

一と七日二た七日とて秋の花

といふ句があります。この場合、第三者には「次男逝く」といふ前書があらうが、なか

らうが、句意はハッキリと感じられるのであります。作者は次男が亡くなつた時の悲しみを詠んだ句であり、つらみ、「次男逝く」の前書をつけただけであります。第三者にとつては「次男逝く」であつても「次女逝く」であつても、差支ないものであります。ただ愛兒を亡くされた時の作であるといふことが判りさへすれば充分なのです。

野猪の如くにと日記に書きしかな (綠之助)

といふ句がありますが、この句は前書がなくとも充分面白味を感じられる句であります。作者は「新年を迎えんとす」と前書をつけて居ります。若し私なら、「元旦」と前書したいところであり、前書がなくとも句意が判るが、前書と句との抱合せで、ほのかにも、前書の力を藉りやうとするならば、年末の感想であるとするよりも、元旦の感想とした方が面白いのではないかと、それを一つの技巧として句を生かそうとすることは、能因法師のてつを踏むものになりませう。前書をつけるなら矢張りありのまゝでなければ全く意味のないものとなり得ます。

靜太に

雨だればわたしに死のといひました

と云ふ句があります。この句には「病床吟」と云ふ前書がつけられてあります。前書と

しては何處までもこの程度であつて欲しいと思ひます。永い闘病生活をしてゐた作者が病床の苦吟には眞に眞剣なものがあり入るやうな淋しさを感じてゐたのであらうことが想像されるのであります。後に、自らの手で死を急いだことがうなづけるのであります。小松園が

遅れ馳せながらもやつと鯉鱈

と云ふ句を詠んで居ります。前書には「長男出生」とあります。これなども、前書はなくても男の子をはじめて儲けた父の欣び方が、よく出てゐますが、この程度の前書なら前書としてうなづくことが出来ます。今まで女の子ばかりだつたことも知り、こゝろ出たほへましくも知ります。

富 語

長男も小松園の句であります。この句も父の欣びが句外にあふれ出てゐるではありませんか。前書の用ひ方も上乘だと思ひます。

高山城二の丸跡から遠望 來つるかな穂高も槍もすぐ東 (晋美)

偶然に出來た話の泉

「すげ笠」主催の全國川柳大會の前夜、名古屋の待人居に集つた一騎當千の柳人達、何かの話から、世界で談されてゐる言語が幾種類あるかといふことになつた。差し話、路郎が話の泉の司會者となつて各人の答案を集めると次の通りだつた。唯三味は十七、これは川柳の十七か月の思ひつき、次ぎは巨郎の廿五、〇九、四十五、周魚、ち呂利、孝三郎の三八は八十、芳浪は九十、星文洞は百八、これは百八煩惱からの思ひつきか、まことは百十八。以上十七と百十八では大變な開きがある。果して誰が正解者か。では一番多くの人によつて談されるのは何語かと云ふ第二問を放つたら、それは英語だと全員一致の答。果して英語が第一試みに參加して貰ひたい。解答は十六ページの下段に掲載。

近畿日本鐵道

伊賀・伊勢方面へは のりば 上 六 河内・大和方面へは のりば アペノ橋



靴から見本手品のやうに出し 大阪市千
 帯を解く影もせわしい終ひ風呂
 秀才と聞く上役の近視眼
 闇屋には見えぬ膏廣を着て出かけ
 はつきりと効くとは云はぬ藥劑士
 下駄だけのお正月とはちと淋し
 いゝ覺悟ボリスの妻としての姉
 待つてゐた聲米だつせ米だつせ
 鮎は諦めてうぐいへ河岸を更へ 鳥取縣悟
 エノケンと高勢が好きなき子に困り
 新涼を襟元に知る 水枕
 連立の弱味國管棚ざらし
 安本の意志に農林省の意地
 汗水は無視して米の値が決り
 腐つても地元へ安く賣らぬ梨
 果樹園の景氣客間を青疊
 ヤミでなら賣るとたり、柿が熟れ
 停電の効果は宵をまごつかせ
 豆喰つて讀んでたらしい頁なり 下松市白
 ライヴアルの輸血で生きるとは知
 妻死んで指粉の街も歩んでみ
 淫賣の部屋でマリアの像を見た
 またくけばまたくさかへす星が怨し
 戀愛至上主義悲しい母が居る
 殺した蚊見ひきもせず筆耕の 石川縣義
 灯の下で女給は嘘にあかすゐる
 稲架をする小唄よ出来が素晴もど

たつた一枚葉書かく間も蚊を殺し
 豫防注射を笑つて農夫稻を刈り
 何時となくひたいの廣さますます
 淋しうて影繪を色々造つてみ 山口縣ル
 十字架を常に感じてゐたしなの
 小説に泣けない女もまた淋し
 失戀のことも言ひ出すいゝ月夜
 英靈が歸つてからの尼といふ
 またしてもやつた子供の愚痴となり
 地下足袋をはけば女もごつい足 和歌山宏
 當選だこれから私腹肥します
 リュックサツクいの重さも知て居
 母の帶賣つた辨當とは知らず
 孫の馬になるとは見えす大獅子吼
 やめどげと云ふにかしわになつち
 ためらへば丸公ですと笑はれる
 重寶なものに闇屋と云ふがあり
 エブロンへせめて若さをとりもど

父重病
 蠅追ふてあげる片手は眼を拭ひ
 おとなしいのは引越して間のなき子愛媛縣
 ひど時は校長室も煙草まき
 乳母車今日は配給物が乗り
 客でなし子供に汽車を見せるの
 逢引の道とは知らず花が咲き
 子に脊廣ゆづり軍服着てる父 大阪府茂
 へ理屈の時だけ憲法引用し
 焼け出された儘で旧家はひつそと
 珍らしく今日は値上げの記事が
 ビストルは硬派軟派は袖の下
 秋風へ蟬螂闘志なほ捨てず 長野縣柳
 履歴書も沙汰なく闇屋續けてゐ



秋春筆雜

今様勸進帳

上田翠光

「いゝえ、決して不謹慎な笑ではないのです。實は川柳の句會で相撲吟の時、交叉点」と云ふ題に『トラックへ巡查は笛で叱るなり』と作つたのですが今の僕を句にする」と、『自轉車へ巡查は笛で叱るなり』になるわけで、われながら苦笑を感じ、つい笑つて仕舞つたのです。」

本社の兼題「値上げ」について、とつおいつ思案をめぐらしながらある交叉点にさしかゝる。句作三昧の僕はビリビリビリツと云ふ笛の音を夢の様に聞き流しながら、ユルリユルリと交叉点を遮断せうとしたところ。唯ならぬビリピリの強い響に、ふと現實に歸り、目をあげてみると豈はからんや、ストップの赤信號……。さき程からのビリピリは僕への警告であつたのかと悔んでゐても後のまつり。

「おい君は百か」
 「いやどうもすみません、いつも此處には信號燈がついてゐなかつたし、それに少し考へ事をしてゐたものですから」
 と云ひながらわれしらすニヤリとした。さあおさまらないのは警官。侮辱されたとても思つたのか怒氣を含んで、
 「何がおかしい、生意氣だぞ」

「いゝえ、今出来たんとは違ひますが、知人の句に『ネクタイになつて巡查は世辭を云ひ』(一ボ)を思ひ出し民主時代の公僕として親しみやすい警察官ではあるものゝ、やつぱり悪い事をした時はやさしくても、かわいものだと思ひまして……」

「もうよい行け」
 虎口をのがれた思ひでスピードを出した僕、始末書一札が川柳二句で御救免になつたと思はず腹の底から愉快になつた。

知人名づけて曰く「今様勸進帳」

無一君を憶ふ
 市場没食子

九月の初め久しく無沙汰してゐた無一君から病狀おもしろからず病院の方も辭めて専ら養生につと

秋も胃へまだ〜モロコシ粉が續き 柳 兒
 向日葵は孤獨に馴れた姿なり 同
 赤い唇女の涙あるかしら 愛媛縣水鏡
 玄關をうつ向いて出る晴姿 同
 計画入逆う様に暮れる日々 同
 馬方は資本家馬車に鞭を持ち 同
 失職の夫にお茶をうながされ 長野縣汗青
 器用さをあきつばくみて胃が弱い 同
 逸る氣をそらすかトンボ眼が動き 同
 引越せば越したて事をおこす性質 同
 手を握られたのが不伴せのはじめ 東京都三星子
 不運とは梨の種さへ眞二つ 同
 横文字も少うし解る女房にて 同
 停電へみんな黙つてゐて寒く 同
 叱られる茶柱二つまで倒れ 東京都沙風
 糞虫は内氣な性質で世を送り 同
 配給所變れば變る世辭が言へ 同
 繪画見た疲れへ煙草賣りにくる 大阪府鬼八
 歌磨へ年寄り何か獨り言 同
 満月にダンサーの眉いと細く 同
 停電へ其のマ、按摩揉み続け 愛媛縣棟友
 風月さんやみよしのさんは何して 同
 職友の刑事事を持つた氣の強さ 同
 百姓であつてよかつた飯の湯氣 高槻市丁路
 女房を相手のダンス子に見られ 同
 逆ろうてばかり自由をはき違え 同
 もの欲しげなる御佛の右手なり 石川縣美瓜露
 リズムなど無き足音で父歸る 同
 大掃除おさつてみんな箸に刺し 同
 欠配を忘れて旅の二三日 吳市綠舟
 みひの秋苦勞忘れた録のつや 同
 後車おして涼しい丘となり 同

軍靴一足春夏秋冬 西東遊賀藤笠
 大阪の夫へ知らず諸の出来 同
 孫が来てやつと懐中電氣つき 同
 何氣なくきく爆音がまだのこり 神戸市凡太郎
 あほらしいほどに紙幣をのぞかせ 同
 物價上向きくたぶれて寝る 廣島縣露斗
 儲かるか儲かりませぬふところ手 同
 ロボットの様にダンスを教へられ 布施市千里
 ざつくばらんの社長だ五尺あるかいな 同
 秋なすび俺に似ている根性して 岐阜市周峰
 夏やせを日記にまでも娘なり 同
 父のこと何も語らぬ成上り 今治市文庫
 父親の叱言マルクスにも及び 同
 飯食ふ影の内緒らしき障子 石川縣夏波
 閑路も揺れて谷間を縫ふたパス 同
 復習を済まして猫の仔と遊び 大阪市葉光
 停電を解除にさせる雨がもり 同
 おなじ野にすゝめと雲雀生まれが 大阪市恒長
 土曜日の電話社長に用がなし 同
 曼珠沙華因果應報を疑はず 和歌山翠夢
 名月や女唇を盗まれぬ 同
 配給の酒で酔ふよな父になり 大阪市良子
 何不足なしに暮せるよい二號 同
 みが入つて灰を落したお茶のみ 大阪市可津美
 酒にくれ女にくれた天往生 同
 おれ一人見るにはおしい月となり 香川縣迷觀子
 ビルの戀青磁色に覗かれる 大阪市小雅子
 どん底の底から仰ぐ秋の月 大阪市美朝
 シネマ出て現實なる寒い風 松本市語呂茶
 雨乞の燈火文化に未だ遠し 大阪市桃村
 酔ひどれに婦人警官もてあまし 大阪市のぶを
 パン食が續いて今日も寝ると決め 大阪市葉菜子

めてゐるが兄からの送金と妻の働
 きでは何となく心苦しいものが
 あるので、寝てゐるまゝに思ひつ
 いた玩具を作つて見たいがそれに
 は青酸カリが必要なのでサンプル
 を作る分だけ少量で結構だから呉
 れないかとの便りが来た。職樂柄
 自殺といふ萬一を疑はれた僕がそ
 うちに見舞に行つた上で考慮しよ
 うと思つてゐる中につひ延び〜
 になり彼の計に接してしまつた。
 庸庸君が死の前日見舞に行つてく
 れて、もう再起は六ヶ敷いとい
 ふ便りしてくれた。生前もう一度
 會へなかつた事が悔まれてならな
 い。

彼は千石荊川柳の産分の親であ
 る。何をしても熱心な男だつたが
 取り分け川柳には全力を擧げてく
 れた。そのくせ川柳はあまり創ら
 なかつた。彼の才智と器用さを持
 つてすれば良い作家になつていた
 るうが、彼は句を創るより川柳作
 家を創る事に努力した。彼は質よ
 りも量であつた。質の方は歸依す
 る路郎先生に信賴してゐたので自
 分の仕事とは思つてゐなかつた。
 千石荊華かなりし頃百八十幾名の
 川柳作家を論じ堂々二周年大會を
 開いたあの盛大さの裏にあつて、
 コツ〜と無一君が今は亡き奇城
 あをやぎ雨君や、使君子君を助け
 てゐた事は當時關係してゐた人達
 が感謝してゐた所である。川柳家
 の殖えてゆく事が無上に彼は嬉し
 いのであつた。

以前は酒も煙草も飲んだ。僕と
 向ひ同志に住んでゐた關係と彼の

家はタコ屋(無一君の母の家)
 で僕の家が喫茶店だつたのでいつ
 も遅く迄呑んで話した。その頃彼
 も僕もひどい不眠に悩んでゐたの
 で或時的場式三郎氏の絶對安眠法
 と云ふ本を購つて来て呉れた事が
 ある。今も僕の手元に唯一つの遺
 品として残つてゐる。彼が川柳を
 解しかけたのもかうした因縁で僕
 に植つけられたのである。

千石荊に入院した彼の再起をあ
 やぶんでゐたのに人一倍養生家の
 彼は見事に僕の危惧を一蹴してく
 れ、川柳としよう一つ輕症患者に適
 當な作樂を興へる療法の二つを千
 石荊に殘してくれた。患者から職
 員に採用された後も彼一流の識見
 が病院でも重寶な存在だつた事は
 ほのかに聞いてゐる。今精練の妻
 と愛兒を残し忽然と不歸の客とな
 る彼の心を押し計れば僕ならずと
 も一掬の涙を惜まぬ人は無からう

品質優良
 ペン先・針ピン・セムクリツプ
 立川ペン先製作所
 上野市



古城の窓より 「上」

——川柳と俳句の區別——

山路 閑 古

現在川柳界にある問題は、新川柳に關しては、俳句との區別如何といふこと、古川柳に對しては狂句との區別如何といふことである。

正岡容氏が「川柳祭」八・

九月號二十六頁に「今日の川柳の大半のごとき本末を顛倒した徒らに俳句擬ひのお寒いもの云々」と述べてゐること。又小泉迂外氏が小生宛私信の中に「俳人といふもの、川柳といふものを少しも解せず、今日にても依然として川柳と狂句の區別が分らず困入申候。連句と同じく、子規が川柳を非文學と貶せし偏見を固守せるものご存じ云々、(二十二年九月七日附)」と述べてゐること、などを資料として、若干所見を記さう。

す、俳人が川柳を知らず、お互ひに越境し乍ら、相手の越境を嗤つたり、罵つたりしてゐる形である。可笑しなことではあるが、又尤もなことでもある。

先づ俳句と川柳の區別といふことについて私見を述べて見たい。

俳句も川柳も元は一つで、山崎宗鑑の「犬筑波」から出てゐる。もつと廻れば、俳諧歌、連歌の中にもその萌芽は認められるけれども、短歌と訣別して、十七字詩として、俳句なり川柳なりの分野へと乗り出して來たのは、先づ「犬筑波」あたりが、そも／＼始まりだといふことよからう。

俳人、柳人共に「犬筑波」を一度読んでごらん下さい。其處に先祖の姿が、類人猿的の相貌を以つて控へてゐるので、かゝるものが先祖であつたかど、先づ一驚を喫するであらう。

宗鑑の創始したものは、俳諧連歌といふものであり、所

謂俳諧であるが、宗鑑はむしろ俳諧精神を定めたと云つてよい。俳諧形式の方は、飯尾宗祇の連歌がそのまゝ、傳はり、芭蕉俳諧の歌仙形式となつたのであるが、その間、右の俳諧精神が採り入れられ、つまり、宗鑑の精神と、宗祇の形式が合致して芭蕉俳諧となつたものと見てよからう。

そこで、論旨を整頓する爲に、専ら芭蕉俳諧の歌仙形式を土台として考へる。

歌仙は三十六句の連句より成り、その巻頭の一句を發句といひ、他の三十五句を平句といふ。この發句が今日の俳句であり、平句が今日の川柳である。發句と平句の區別が、即ち俳句と川柳の區別といふことになる譯である。それ／＼の製作態度がこれできまつて來るのであるから、これを以て話を進めるのが、一番判りがいゝかと思はれる。

發句の特性は、有季と切字であるが、季の起りは季節の挨拶から始まつてゐる。(このことは、宗祇の「吾妻問答」其他を参照されるとよく判るが、今はそのやうな委しいことは云はない。暑さ寒さの、その折、當座の季節感を述べて挨拶句とすると云ふ、連歌の形式が發

展して、有季句を生ずるに至つた。だから季にはあまり藝術的意義はなく、大凡方便若しくは習慣として傳はつてゐる譯である。芭蕉はこの季なるものに、獨特の藝術的意義を與へてはゐるが、その半面に於いて、季は無用ではないかと云ふやうな疑をも持つてゐた。この芭蕉の兩面をそれ／＼一面宛捕へて、俳壇に有季論、無季論といふものが行はれてゐる譯であるが、何れもその論據を芭蕉に置いてゐるのは、單文孤證と云ふか、楯の半面のそしりは免れなない。その争ひたるや謂れなきことである。

ともあれ俳句には季といふものがあること、御合點ありたい。さうして切字と云ふのは、十七字を以て獨立詩歌の体裁をととのへる爲の手段であり、ピリオドに相當するものである。

これが俳句の原型であつて、十七字、季、切字の三要件の他には、何の拘束もないのである。これから出て來る特色としては、俳句には題詠がないことである。句會などでは整理の都合上、假りに季を以て題としてゐるのであるが、所謂題詠ではない。「出産」とか「長靴」とか云ふやうな主題そのものを出す

安産のために

ワダカルシューム錠

ことは、俳句では行はれてゐない。俳句は獨立性を主張するものであるから、題など縛ると云ふことは、その本質と相容れない。何を謳はうと全く自由にしてゐるのである。

(附言、今日はあまり切字と云ふことは問題にされないけれど、切字がなくなつた譯ではなく、すでに生理化してしまつたのである。や、かな、でなければ、何となや、can't read it である)と云ふやうな状況に達して居り、云はずとも切字は行はれてゐるのである。

平句の特性は、前句に依存するといふことである。平句の前には必ず前句があるのである。字数は十四字、十七字何れでもよいが、獨立化する

場合には十四字では意を盡し難いから、自然に淘汰されて十七字句が残つた。平句にはその他に何の拘束もないから、結局前句を持つてゐると云ふことに、條件のすべてが要約される。従つてこれから出て来る特色は、調和依存である。即ち前句との調和といふことが、平句の生命とされるのである。従来不即不離といふことが云はれてゐるが、一言にして云へば、調和の要領はそれに盡きてゐるであらう。

川柳は、その形式の上から云へば、獨立化に際しても、前句に依存すると云ふことから、先づ具体的に前句附といふものとなつて現はれた。それが亡びて後、今日の川柳の題詠となつたのである。川柳の題詠は、方便ではなくて、實は藝術上重要な意義があるのである。「出産」「長靴」といふやうな題が出るのは、その意義に觸れてゐるのであつて、それは前句附が川柳に移行する時に、必然的に現はれて來たのである。

も角も「景物」といふことを提唱し、「猿田彦」「目出度し」「紫」「矢立」「玄關」「料理人」以下三十ばかりのものを例示してゐる。(柳多留二篇末尾参照) さうして前句が失せて後は、右の如き景物を主題とせねば、佳句は生まれなないであらうし、従つて柳翁の選にも入り難いであらうといふことを警告してゐる。

(彼は文章が拙いから何を云つてゐるのか、一見よく判らんけれども、その氣持は判る。)

これが即ち題詠の起りであり、平句としての川柳の荷ふべき運命を指示したものである。

前句附は附合趣味を基調とし、心附、句附といふやうなもの、微かながら存して居るの調和であつた。然るに題詠は「結ぶ」といふことの趣味が土台であつて、必ずその文字を詠み込まなければならぬことになつてゐる。

不即不離よりは、むしろ象嵌の趣味を立てたものであり、これが後に多少とも藝術的に發展して今日の川柳となつて來る譯で、いづれ稿を改めて申し述べよう。

こゝでは、原型としての、俳句と川柳の區別を述べ、これがどうして交錯するに至つたかといふことを、これに續いて述べる豫定。



古句研究を志す人達に

不朽洞主人

古句を研究するのに、「柳枝」をテキストにするのはよいが、誰も彼もが、「五番目は同じ作でも江戸生れ」からはじめるのはどうかと思ふ。双六ではあるまいし、百六十七篇を誰も彼もが振り出しからでは遂に上りは來ないであらう。

「古川柳」に山澤碌々氏がウンチクを傾けて研究された参考評註の「柳多留初篇」が毎號發表されてゐるから、山澤氏の解説に異説があれば、その異説のみを公に示して、共に研究をすゝめると云ふ方針がとりたいたものである。曾て武笠山椒氏が「柳枝」の四篇までの研究をして、生前に三篇までを公にされたが、四篇はとうとう世に出なかつた。假りに、一人の研究が四篇位で終るとすれば、次に誰かが五篇から八篇までを引き上げて、リレー式な研究方法を採用すれば比較的短期間に、百六十七篇の研究が完成されるのではないかと思ふ。兎に角、合作でもいゝから、百六十七篇の評譯の礎稿をつくりあげたいものである。

山椒氏の研究にしても誤譯はあつたが、誤譯は誤譯だけ拾つて検討すればよいのではないかと思ふ。山椒氏の研究された四篇の原稿が、武笠家の書架の隅に今なほ保存せられてゐるものか、或は書肆の原稿函の中に埋れてゐるものか、それを探し出して遺稿を發表するの最後の一つの仕事ではないかと思ふ。私の仄聞してゐるところでは既に書肆の手に移つてゐたやうに思ふ。もしそうだとすれば、その書肆が戦禍によつて焼失してゐるかどうかも、確める必要があらう。一方、武笠家の家人に就いて、原稿の行術を訊くのも一策だが、氏が亡くなられた頃に、札幌で學生生活をされてゐた令息の所在が不明なので、今では問合せることも出来ない。しかしそうして原稿を発見して下さる方があれば發表の勞をとつてもいゝと思つてゐる。

古句研究と云へば考證が、そのすべてだと思つてゐる人もある。それは大きな間違ひだ。考證も大切だが古典の詩的研究と云ふことは更に重視しなければならぬものである。しかし、この方面に全力を傾けてくれた人がまだないことを遺憾に思つてゐる。曾て本誌で梅本廬山、森東魚、蛭子省二の三氏を煩はして、「武玉川研究」の發表をしてゐた際、廬山、省二の兩氏は何處までも考證本位であつたが、東魚氏は時に詩的研究の片鱗を見せて、讀者に考證以外に詩的鑑賞の欣びを與へられたことがある。私に、もう少し餘暇が出来れば純然たる詩的立場から「武玉川」研究の發表をやつて見たいと思つたが、柳界そのものに就てあまりにも多くの仕事を擔當してゐる私としては、自分でひとり樂しむ程度にとどまることとならう。

僅に十八篇しかない「武玉川」の研究にしても、本誌で發表してゐた量で計算すると私の生存中には逆も完成が覺えないことを書いたことがあるが、まして百六十七篇と云う尅大な「柳枝」においておやと云ひたい。そこで一人で四、五篇位を單位に、擔當すれば三十幾人の人達で「全譯柳枝」の礎稿が出来上る勘定になる。こんな方法で研究したものを二三の篤學の士で目を通せば百六十七篇の研究も敢えて至難ではなからうと思ふ。分科的な研究はそれからいゝ。

要するに、これからの古句研究に志す人達はカツキヨ主義の研究を捨て、同一研究室の一研究員と云ふ態度でやつてもらひたいものである。





いのある句を創れ

投稿清規 用紙は原稿用紙、文字を正しく開き、月日及場所記入、締切は月廿五日、投稿先本社宛

本社十月例会

於 生根神社

五日の午後一時から句會を開いた。玲之介、黙平、鳥莊と云ふ珍らしい顔が見られた。

路郎主幹は「名句の鑑賞」と題して講話をされた。句はすべて須崎豆秋氏の句であつた。斯うした柳話はこの句會以外には聴けない實のあるものであつた。

(幹事)

出席者 路郎・登詩夫・美朝・小雅子・豆秋・勢三・火泥・綠雨・葉平・恒良・黙平・琴人・白柳子・十空子・喜代志・翠光・梅子・六文・鳥莊・幽王・茂・吸露・玲之介・史葉・香林・一甫

兼題「値上げ」 麻生路郎選

百倍ならそんなものと驚かず 白柳子
美しくい言葉で値上げ追加され 史葉
官業の値上げそらつと皆續き 鳥莊
値上げした煙草の煙でストを練り 和風
机上案最後の決は値上げなり 路郎
値の上るほど骨董に未練でき 竹莊
まだ上りまつせと値上げおかせ 茂
値上げしても電光石火刺り終り 登詩夫
二萬圓服屋でど膽ぬかれたり 香林
大臣の顔は値上げを知らぬつや 吸露
上れくごうせ呑まれぬ酒なら 豆秋
値上げするポスターはかり書く繪具 勢三
値上ともいわず店番つんと居る 喜代志
また値上げびつくりして笑ひやう 綠雨
大阪に眞似てたちまちはな上げる 勢三
◎も上つてますと言ふ間屋 史葉

又値上げかへと百圓札崩つし 琴人
パリカンを買つて値上げにさからう氣 勢三
我も彼も生きればならぬ値上げを 十空子
お隣りは値上げ少しもおごるかや 火泥
値上りは人の笑ひを殺いでゆく 鴨水
こないだと同じな品で倍になり 白柳子
美術商ある日一けたふやしとき 茂
うつかりと元の値段でつりをまじ 白柳子
さるほごに火葬料まで値上げされ 十空子
値上げした初發へ新聞記者も乗り 小雅子

兼題「値上げ」 浪 玲之介選

お隣りは値上げ少しもおごるかや 火泥
又五圓豫算が違ふやみ煙草 白柳子
ものみんまあがらしみん秋の風 翠光
また上りまつせと値上げおかせ 茂
百倍ならそんなものと驚かず 白柳子
値上ともいわず店番つんと居る 喜代志
値上りを見越して値札よく書き 同
パリカンを買つて値上げにさからう氣 勢三
もう一つついでゆけぬ月給袋なり 翠光
うつかりと元の値段でつりを待ち 白柳子
又値上げかへと百圓札崩つし 琴人
値上りを知らずは鳴いて居る 十空子
鬧市に凡惱として竹ち續け 玲之介

兼題「値上げ」 木下幽王選

上れくごうせ呑まれぬ酒なら 豆秋
値上りは人の笑ひを殺いでゆく 鴨水
物價高むしろ片輪がうちやまれ 玲之介
大臣の顔は値上げを知らぬつや 吸露
うつかりと元の値段でつりを待ち 白柳子
また上りまつせと値上げおかせ 茂
月の道今日から値上の風へ行く 美朝
値上げした初發へ新聞記者も乗り 小雅子
パリカンを買つて値上げにさからう氣 勢三

兼題「値上げ」 上田翠光選

値上り待つて男になると決め 玲之介
机の上で安本氣安う値上げする 葉光
非憤慷慨しては値上げをあきらめる 竹莊
値上の日矢張り電車で踏まれたり 黙平

父兄會々費を上げて劇をみせ 火泥
いづれ手の出ぬ値上げの札を見る 黙平
百倍ならそんなものと驚かず 白柳子
値上りにほれてゐるからよく稼ぎ 香林
値上りの札へ足りない錢を持ち 琴人
又値上げかへと百圓札崩つし 同
上れくごうせ呑まれぬ酒なら 豆秋
値上げした初發へ新聞記者も乗り 小雅子
我も彼も生きればならぬ値上げを 十空子
値上りは人の笑ひを殺いでゆく 鴨水
パリカンを買つて値上げにさからう氣 勢三
二萬圓服屋でど膽ぬかれたり 香林
値上げした初發へ新聞記者も乗り 小雅子
値上げ値上げ飲むな喫ふな云ふ如し 翠光

席題「戀 仇」 清水白柳子選

戀仇居ない時ちとてれるなり 六文
三角の一トすみにあて氣をうつかひ 翠光
戀仇ない戀などは淋しかる 琴人
戀仇コトも先きに出されてゐる 十空子
成程あいつの方がいい男 火泥
あかんべーをして居る小さな戀仇 史葉
戀仇忌々しい金がありがた 史葉
戀仇五十を過ぎた課長さん 火泥
戀仇又來てるなTEAROM 葉平
挨拶の瞳をおぢる戀仇 喜代志
戀仇我が娘にもあるか知ら 六文
借財にまでからんでる戀仇 史葉
戀仇祭の笛に思ひ出し 恒良
戀仇できて以來の神詣で 幽王
戀仇男の意地が恐ろしい 小雅子
戀仇秘め遠くへ去つた戀仇 美朝
戀仇ライカを提げてにくらしい 勢三
戀仇今日も同じパスに揺れ 小雅子
デートで先に待つてる戀仇 鴨水
左遷組どちらも同じ戀仇 史葉
戀仇素知らぬ振りながめ合ひ 六文
その話さわつて見たい戀仇 一甫
戀仇僕が仇と知らぬらし 翠光
ふるさとの百姓である戀仇 豆秋
戀仇話をすれば白らけて來 鳥莊
戀仇お米を食へる腕を持ち 勢三
戀すれば皆戀仇らしく見え 茂

★お知らせ

文化國家を目指す再建日本の大和文化を川柳を通じて見直したい、又その發展を期したため、左記に依り縣下の新春川柳大會を開催することになりまし。川柳を作る人は勿論、作らない方も御参加下さい。

共催 川柳雜誌社大和支部 川柳むつみ社

新春川柳大會

日時 廿三年一月四日(日) 午前十時

會場 奈良市北魚屋町 奈良女子高等師範學校内 佐保會館

兼題「仁王さん」 三句 麻生路郎選 「鹿」 三句 高橋月南選 「圖書館」 三句 尾崎方正選 「人力車」 三句 深井凡々選

選者及び課題當日發表 席題「奈良と川柳」

講演 川柳雜誌社主幹 麻生路郎先生 「狂言と川柳」

呈賞 兼題席題別に採點、各五位迄 會費 二十圓

其他 (一)畫食、鉛筆、下足包装用紙 持參の事、(二)投句のみの方は會費半額同封(十二月廿日迄着便締切)左記宛に

奈良縣宇陀郡三本松村向淵 川柳雜誌社大和支部 上田翠光

奈良縣生駒郡平群村樫原 川柳むつみ社 深井凡々

幹事 上田翠光・尾崎方正 西垣錦風・深井凡々 山下岸柳・水村京介

戀仇床屋出てゆく憎らしさ 琴人
戀仇ボチくお茶を習ふなり 翠光
戀仇夜行列車で出かけたなり 白柳子
都々逸で當こすつてる戀仇 同

席題「水害」 武部香林選

降り續く雨に水害又安じ 小雅子
 水害の記事へ開値が又上り 同
 水害を家出の汽車の中で知り 同
 こぼろぎの屋根でなっている水害地 茂
 水害へ待つてましたの野黨起ち 幽王
 水浸し屋根の上には猫もある 豆秋
 水害の人等裸で拜謁し 葉平
 水害にあつてそくりが流れゆく 吸露
 水害で掛がさつぱりよりません 恒秋
 上敷きをもう賣りにくる水害地 勢三
 禁煙の五日を水害地へ贈り 同
 水害地お米も芋もあつたのに 同
 水害でんねとヤミ屋いひわけし 登詩夫
 水害へ閨屋も葬れん屋も流れ 幽玉
 鶏も少しは泳ぐ水害地 白柳子
 水害へ思ひもよらぬ天皇旗 喜代志
 家は浮くものと知らざり水害地 白柳子

席題「隘口」 五選

隘口之部屋とは知らず茶を運び 玲之介
 隘口之傳へて欲しい策もあり 一甫
 隘口へ本氣になつた十八九 白柳子
 隘口が開え座敷へ入りかた 玲之介
 隘口をへへと笑ふいと度胸 珍之介
 隘口は小使室へかたまつて 豆秋
 そもくの起り隘口からと知れ 白柳子

新憲法實施記念句會

五月四日 午後一時 於 生根神社

いよく新憲法が實施されるので、男
 女同權がやかましく云はれてゐるが、又
 一方では、そんなことは何處吹く風かと
 云ひたい連中もあるが、兎に角、今後の
 家族制度は波立たざるを得まい。路郎主
 幹の講演「新憲法と川柳」はそのことに
 觸れられ、同權の句、嫁姑などの句に就
 て語された。五時すぎ散會。

出席者 路郎・鳩花・浪花・溪堂・香林
 縁雨・美奈子・栗・好郎・千舟・紫香

醉月・竹莊・史葉・博・庸司・生々庵 夢裡

兼題「家」

麻生路郎選

空屋かと思れば土蔵に立つ煙 千舟
 屋根があら家だと云ふ家に住み 生々庵
 家持つて見てあれも要りこれも要り 紫香
 共稼ぎごちらも家の鍵をもち 竹莊
 安達ヶ原のやうに燒跡の家灯し 栗
 闇太り今度土蔵建てたそな 庸司
 相續へ外の子供もつれて来る 好郎
 結局我が家をほめて帯を解き 栗
 九尺二間されど艶ある床柱 香林
 怪談の家と承知の引越しだ 栗
 油繪にされた我家はゆがんでる 栗
 婚約も家の話で行詰り 博
 天氣晴朗家の庇の燕の巢 香林
 家附きの娘ダンスへ通ひだし 千舟
 拂ふたび出て頂戴の家に住み 溪堂
 氣の弱い兄へ憲法あらたまる 路郎

兼題「言論」

中島生々庵選

言論は自由お嬢さま内氣 潮花
 言論の自由がさせた親不孝 同
 喋るだけ喋り女は寝てしまひ 香林
 ある政黨へ

猿ぐつはとれて憾がすさまじい
 スピーカーまだ云ひ足らぬ音となり
 言論の雄と言はれて質をおき
 言論の女の口は派手になり
 言論自由あつてすさまじき女なり
 逆らはず子の言論を聞いてやり
 石の下の雜草聲を出し給え
 言論に勝つてK氏は辭めさるれ
 専門家ぞろい言論なごらるす
 言論が過ぎて仲裁なごらるす
 言論へ妹も云ふ事が少しあり
 言論がたつてG項該當者
 言論の自由妹に見すかされ
 云ふ丈は云はせて俺は金を貯め

兼題「義務」 西尾 栗選
 一粟の義務を老母はカナで書き 葉光

禮などは義務だと巡査受けけす 竹莊

義務は嫌私にエゴとはいからず 博
 看護婦の義務は寝棺の後につき 千舟
 臨終に只義務だけの注射する 溪堂
 増加所得税義務とは云へぬ税とされ 紫香
 義務ばかり押しつけられた國家主義 清
 運配欠配も國民の義務とされ 生々庵
 義務果し得ず遺言状をしたとある 美奈子
 義務もへちまおすかいな仲居逃げ 生々庵
 先生は義務の言葉強くはくはく 潮花
 義務のない言葉脅迫じみでくる 同
 看護婦のつとめ以上のものにふれ 好郎
 親の義務はたして末生流指南 潮花
 権利だつたや義務だつたやビルの午後 好郎
 義務權利むかしの浮世あたたか 栗
 表彰へ義務を果したまでと言ふ 栗
 之が義務よと女嬢しそ 栗

席題「振袖」 武部香林選

一枚の振袖さへも米にかへ 清
 實食ひも振袖だけは残しとき 好郎
 振袖へ母は小さい氣を使ひ 紫香
 振袖で叩く姿態する術も覚え 溪堂
 只歩くだけで振袖よう云はず、竹莊
 振袖へジーア何やら言ふて去り 好郎
 借着とは見えぬ振袖着て出かけ 庸司
 振袖を諦めて見る飾り窓 千舟
 振袖に思ひ出あらた倦怠期 同
 振袖でたてげ廊下の灯がまぶし 潮花
 振袖に縁の風がたはむれる 千舟
 振袖へ今日吉日の灯をあびて 潮花
 日本の土産に振袖買つて去に 史葉
 振袖の夢へ四月の櫻ちる 潮花
 振袖も一度母ははなれて見 潮花
 振袖の長さ電車へもてあまじ 庸司
 祇園から出る振袖へ春かすみ 潮花
 義理の子と見えす振袖美し、香林
 振袖に包み切れない程肥り 香林

せんざいへ長女も次女もすわりに来 潮花

紙の様な餅せんざいに浮んでる 庸司
 退院の朝せんざいをふるまはれ 千舟
 せんざいに小豆のあつた賑やかさ 溪堂
 モチ一つ入れてせんざい高くつき 竹莊
 お隣もせんざいありまじピラを張り 好郎
 せんざいに父もつき合う日曜日 香林
 せんざいの小豆を箸で追ひまじし 潮花
 せんざいのお代りをする若夫婦 紫香

席題「君と僕」 五選

主義の爲君と僕とは仲違い 清
 ネクタイもおんなじ若き君と僕 紫香
 悪友といふ嬉しさにある君と僕 栗
 一瞬は歩いて別れる君と僕 紫香
 新緑もたまつて歩く君と僕 史葉

川濱寺支部句會

八月十六日 於 諏訪森會館

名案・神經・栗
 名案の主は裏家で瘦せ細り 小松園
 名案を皆な云ひ出す子の遊び 百生
 名案もなく吊革にぶら下り 喜代志
 うかつさをその名案に啜れる 溪堂
 名案の給食すぐに行詰り 路郎

阪田騰寫版

大市北區芝田町二五

株式會社 阪田商會

電話 一六三九番



六號室

▼前號で椅重描くエキソテイックなランプでなくつてはと贅澤を云つてゐたが、停電難でとうとう小さな洋燈を一ヶ購めた。ラツキヨのピン詰をチョンギツタやうなぶさいくなホヤである。ガラス一面にブツ／＼の泡がある。ガラス一面がランプですと賣つたもんだ。尤も買う奴も買う奴だが、兎にも角にもこれで夜の原稿陣にそなへることとした。あゝ耐乏生活の前途又リヨウエンたり矣だ。▼本號の讀物としては山路閑古氏を煩はした「古城の窓より」があり、東野大八氏の「川柳談義」がある。そこへ拙稿の「續川柳講座」がある。その他等々々がある。停電勝ちな一夕の伴侶としては充分であらうと思ふ。本號を十二月號として世に送ることとした。次號は新春號だ。少しく面目を改めて見参しようと思つてゐる。御愛顧を願ひたい。▼十二月二日に名古屋の十洲樓で開催された「すげ笠」誌主催の全國川柳大會へは豫定通り出席した。成績一〇〇パーセントだ。孝三郎君も男をあげた。有町君の涙ぐましい努力も買つてやるべしである。私は電車にもみくちやにされながら、大會前夜に孝三郎君の待人居に御厄介になつた。先客が既に詰めかけてゐたので奥様は火事場の騷ぎだ。十洲樓の會場もフルマークなら、天候も上々吉。夜のホテルの懇親

も歡喜の渦、懐しい顔々に巡り遇つた。未だに感懐がさめない。しかしこれ以上詳しいことは書かない。「すげ笠」誌のお株を奪つてしまふぞうだから。▼三日には新東海新聞主催の座談會に出席した。歸りの切符の列にある間に、大阪へ來るといふ〇丸、三太郎の兩君にはぐれてしまつた。辛じて最後の電車をつかまえたが、中川驛でヤミ狩があつて手間取られ、大阪へついても上町線のレンタク

募 集

每號募集 (毎月五日締切)

近作柳樓雜吟廿句 麻生路郎選
川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▲投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲『近作柳樓』は一般作家の雜吟を募る。
▲『川柳塔』への投稿は不朽洞會員に限る。

がない。まよと伊賀線に乘換えて上野市の老妻の疎開先へ出向いたが、葎乃は大阪からまた戻つてゐない。そのまゝ布團の中へもぐり込んだ。翌四日午後一時辰子女史の宅で晝食の御厄介になつた。この間二十五時間何一つ口に食ひなかつた。三食飛んでも更に元氣は失せない。これでなくては「川柳雜誌」を背負つてはいけな

は私の世嗣ぎに譲り渡してやりた

動 靜

(路)

▼本社十月例会は五日午後一時から生根神社で開催盛會▼川雜下松支部旬會は十月一日轉太居で開催された▼川雜久賀支部では十月五日午後七時から路三居で川柳雜誌社久賀支部創立旬會を開催した發展を祈る▼今治みなと川柳社秋季大會が十月五日商工會議所で開催された▼大阪交通局川柳會では十月十一日午後一時から大阪市交通局職員寮で交通局川柳結成大會を開催、路郎主幹の「川柳と生活表現」の講演があつた▼濱寺支部は暫く夜の會を續けて見たが停電々々に又晝の會に戻して十九日に開催、路郎主幹出席▼扶桑金屬組合文化部川柳會は十月二十二日午後四時から開催、路郎主幹出席▼十月廿四日午後二時から大阪通信病院川柳會、路郎主幹出席▼川柳雜誌社大和支部では川柳むつみ社と共催で、奈良縣下の新春川柳大會を一月四日(日)午前十時から奈良女高師の佐保會館で開催、川柳を通じて大和文化を見直すのと、縣外柳人の來投を歓迎してゐる。(別欄廣告参照)▼愛柳社(山形縣)主催の全國川柳大會は準備の都合十一月三十日に延期された▼「川柳春秋」が十月一日京都市上京區知恵光院道中筋角川柳春秋社から刊行▼川柳廿茶クラブ(金澤市彦三番丁)の「廿茶」は十月十二日號から「新人」と改題した▼安部忠三氏は高知放送局長に榮轉され九月末に高知へ赴任された▼堀口塊人氏は國際新聞十一月八日號に「冬來りなば」を執筆▼岡一ロウ氏の「古川柳通信」はかなり有益な記事が掲載されて

あるが(謄寫版刷)今少し讀みよくして欲しい▼廣瀬恒太氏(日田市)が「郵便局長では全く行きつまり下駄をさかんに造つて居ります」と悲鳴をあげて來た。同氏のためにも過相の善處をのぞむ鳥巢、佐々木朝敏氏(洲本市)が、三月三日午後三時に永眠された、謹んで悼む。

社 告

▼左記へ支部を新設した。附近の柳友は協力されたい。
大和 支部
幹事 上田翠光氏
(奈良縣宇陀郡三本松村向瀧)

清談・商談
お待合せに
喫 茶
みどり

みどりでの商談
運が向いて來る
上六交叉點西北角

高級化粧品客器に協賛！
ヤマギンの……
黒硝子
大阪第一百貨店
西通一丁目四番地
山 銀 株 式 會 社
電話 南川四七番

感冒 解熱に
Ominin
オミン
黒田製藥株式会社

偶然に出來た話の泉のカギ
第一問の正解は一五〇〇種。第二問の正解は中華民國語。

B列5號 毎月一回一日發行
川柳雜誌 第六卷
一冊 金十圓 (送料五拾錢)
半ケ年概算 金六五圓
一ケ年概算 金一三〇圓
昭和廿二年七月廿五日印刷
昭和廿二年十二月一日發行
大阪市住吉區方代四丁目二番五番地
行印別入 麻 生 幸 二 郎
大阪市住吉區方代四丁目二番五番地
發行所 **川柳雜誌社**
電話 日辰六七五〇